

弥生後期天王山式土器成立期に おける地域間関係

石川 日出志

要旨 近年、弥生時代研究が、従来の理解の枠組みに依存したまま、地域ごとに分断される傾向が強くなっていると感じる。弥生土器研究も、これまで地域ごとに土器型式の変遷を跡づける作業を重視してきたために、各地の土器型式が相互に関連しあう動向、つまり地域間関係を描かないまま、さらにその傾向を強めているかにみえる。

そうした現況を改めるひとつの試みとして、本稿では、東北地方における弥生後期前半の土器型式である天王山式土器を取り上げる。天王山式土器は、中期後半までみられた東北地方内の地域差を解消して成立した北方要素の顕著な土器型式であると言われる。しかし、特にその前半期には明瞭な地域差が認められる。そのうち天王山式前半期の日本海側に分布する地域型式である砂山式土器が形成される基礎となった宇津ノ台式の動向を跡づけると、東北地方北部の要素が南部に浸透する経緯や、東北地方各地に影響を与える状況が明らかとなり、天王山式が形成される準備状況が見えてくる。また、そうした東北地方における土器型式群の組み替え過程の中に北陸の小松式土器も関与している。本稿は、弥生中期末から後期初頭、ほぼ西暦紀元前後に、東日本の日本海側の広い範囲にわたって地域間関係が再編される歴史動向をみいだす試みとするものである。

キーワード：弥生時代、地域間関係、土器型式、天王山式土器、宇津ノ台式土器、小松式土器

1. 問題の所在

近年、弥生時代研究が地域ごとに分断される傾向が強くなっている。とくに東日本でその状況が顕著なようである。充実した遺跡の調査は実施されている。しかし、資料を分析する当事者がその地域内にしか眼を向けないために、弥生時代社会の動態を描く資料であることに気づかないでいる場合が目につく。弥生土器研究の場合、東日本では土器型式ごとに差異が明瞭であることから、地域ごとに型式変遷を跡づける作業が蓄積されてきた。しかし、各地の土器群ないし土器型式が相互にどのように関連しあっているかを読み解く試みが少ないために、資料が不足な段階に作り上げられた土器型式理解の枠組みが従前のままに温存されるという結果を招いている場合が散見される。地域ごとの土器群や土器型式の相関を読み解くことによって、従来の土器型式理解を解きほぐし、再編する作業が今必要であるし、それに向けた試行錯誤の

蓄積が求められる。

そうした試みのひとつとして、本稿では東北地方における弥生後期前半の天王山式土器を取り上げ、特にその成立過程に注目する。この天王山式土器は、東北地方のほぼ全域に分布し、中期末まで認められた東北地方各地の地域差を解消して成立した土器型式であると言われる。また、北海道縄文文化の恵山式土器と共通する属性が認められることから、北方的要素の明瞭な特異な土器型式であると評価されてきた。しかし、天王山式土器には、特にその前半期に顕著な地域差が認められるし、また北方的要素がどのような経緯で東北一円に波及して天王山式が成立したのかについても、論及はされてこなかった。それは、天王山式土器の資料が比較的少なかったこともあろうが、それ以上に各地の天王山式土器の共通点に注目するあまり、相違点や相関関係を読み解く試行錯誤の蓄積が少なかったことにも原因があろう。

本稿では、まず天王山式土器の前半期には地域ごとの差異が顕著で、少なくとも4つの地域型式が認められることを示し、次にそのうち日本海側に分布する砂山式土器にもっとも早く北方要素が定着し、後半期の典型天王山段階にそれが各地に広まることを指摘する。さらに、砂山式に先行する中期末の宇津ノ台式・山草荷式土器にすでに北方要素が浸透しており、そこには逆に南方・西方から北陸の小松式土器の要素も受容され、定着していることを確認する。そして、この段階に東北地方の日本海側一帯で広範囲にわたる土器型式属性の授受・再編成が進行する姿を認め、そこに一定の歴史動向の反映を読み取りたいと思う。

2. 天王山式土器の2期区分と地域差

(a) 天王山式土器の段階区分

天王山式土器は、1950年に藤田定市氏が調査した福島県白河市天王山遺跡から出土した土器群（藤田1951）を基準として、同年伊東信雄氏によって設定された土器型式である（伊東1950）。工字状文や波状口縁・突起など亀ヶ岡式土器の伝統をとどめるとみて、初め弥生土器でも古い時期とされた（伊東1950・坪井1953）が、その後中村五郎氏や小滝利意氏によって会津盆地の弥生土器編年が整備された結果、1960年になって弥生後期前半に位置づけられるようになった（中村1960）。現在でも北陸では弥生中期後半とみる意見が主であるが、それは遺跡での不確実な出土状態に依拠したものであって、新潟県和島村松ノ脇遺跡における土器型式ごとの分布状況や、東北地方各地の弥生中期末の土器との型式学的検討からみて、後期前半に位置づけるべきである（石川1990・2000a）。

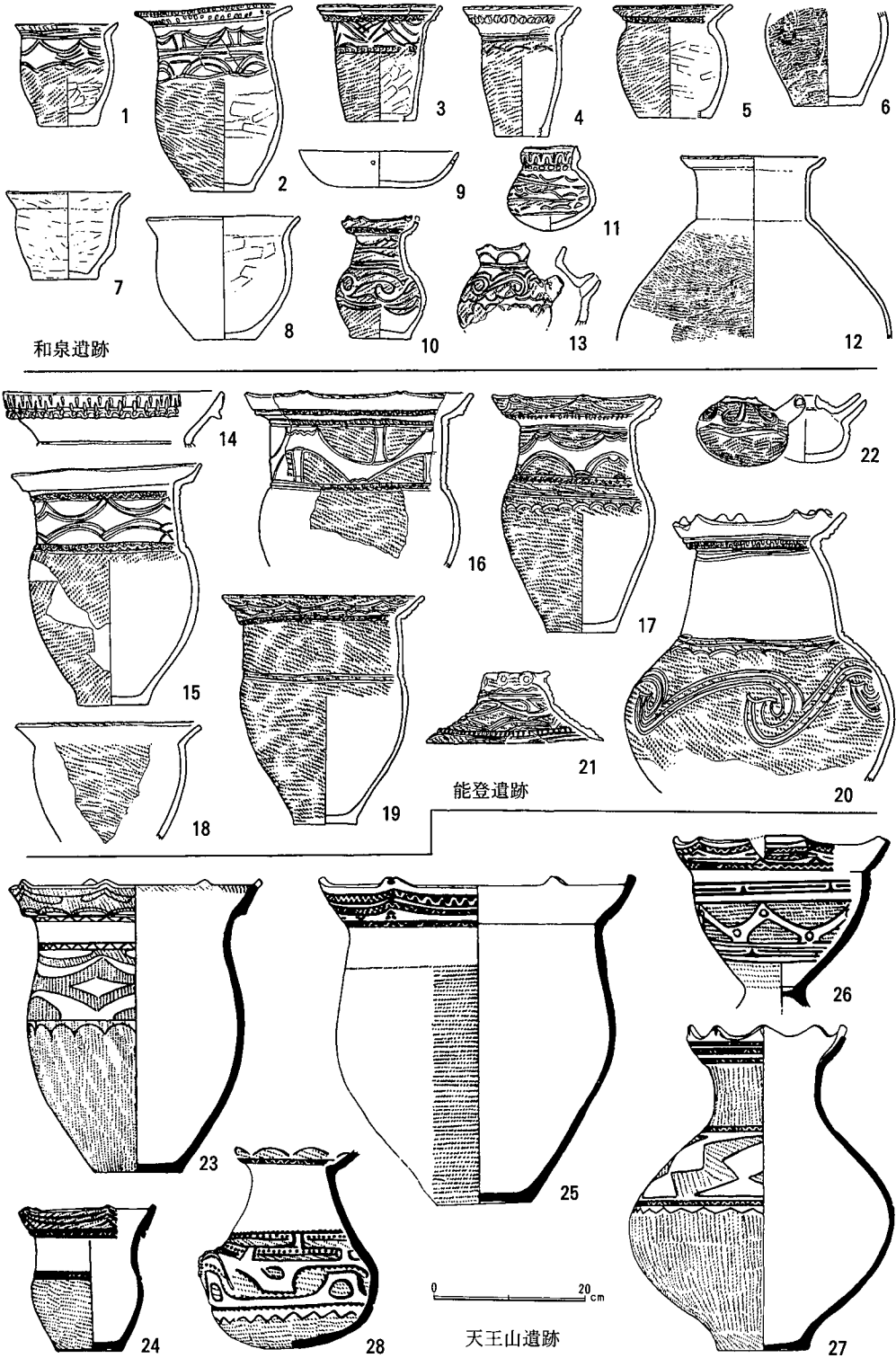
しかし、天王山式土器を論議する際には、当然ながら天王山式土器の範疇をどのようにみることが重要である。1989年に佐藤信行氏が、天王山式成立期の一群としてⅡタイプを設定されて、天王山式土器をより限定的に理解しようと呼びかけ（佐藤1989）、最近では再び天王山式の成立を跡づけるために従来天王山式と一括してきた資料群を見直す取り組みが盛んである

(相原 2002・相澤 2002・鈴木 2002a・2002b・野田ほか 2003)。そのなかで鈴木正博氏は、天王山遺跡出土資料の中核を担う型式学的特徴を基準として天王山式土器を定め、その前に2段階の変遷を考える。筆者には、和泉遺跡(木本 1991)→能登遺跡(大越 1990)→天王山遺跡(坪井 1953)の変遷を読み解く鈴木氏の見解がもっとも重要と判断する¹⁾。第1図が各段階の標準資料の一部で、天王山式土器天王山段階の型式的特点の詳細は拙稿(石川 2000a)を参照願うとして、3段階の変遷の要点を示そう。

天王山式の器形と文様帯は、筒形が頸部をなし、頸部とその上下の口縁部と体部に文様帯を置く。筒形の頸部は、和泉段階では壺に明瞭なものの、頸部装飾ある甕1～4は胴部の膨らみが緩いために頸部の筒形は目立たず、能登段階になると胴部が強く膨らんで筒形の頸部が明瞭となる。3段階の変遷がもっとも明瞭なのは口縁部のI文様帯である。和泉段階では、I文様帯が未発達で、甕では3のみが頸部と段差をもつ口縁部となり、沈線1条からなるI文様帯を構成する。壺や注口土器は天王山式に特徴的な内湾口縁で、注口土器13のみI文様帯に連弧文が充填される。口・頸部界の区画線に交互刺突文が採用され(3・5・10・11)、11では兎Ⅱタイプの交互刺突文となっている。これが能登段階になると、頸部と口縁部との段差が明瞭となり、兎Ⅱタイプ文様(14)や連弧文(17・19)など、I文様帯に文様構図の充填される比率が高まる。天王山段階のI文様帯は有文率が高く、交互刺突文を主文様とする例(25～27)も目立つ。こうしたI文様帯の拡張は次の屋敷式土器へと継承されて、さらに幅広くなり、その結果として文様構図が間延びしてしまう。

頸部や胴部のⅡ文様帯も段階ごとの差異がある。和泉段階では川原町口式以来の2条描き手法(1)が残存し、2段重ねた連弧文は上下で対となる例が目立つ(1・2・10・11・13)。能登段階から充填縄文手法による連弧文を上下で半単位ずらす例が多くなる。口縁部が滑らかに外反する器形(1・7・8・18)や付加条とみられる縄文原体といった中期後半以来の伝統が、和泉段階に明瞭で、能登段階まで認められる。天王山式の特徴である縄文の条が縦走・横走する手法も、和泉段階から能登段階へと横走例が増加し、天王山段階で縦走が明瞭となる。このように、和泉→能登→天王山の変遷は漸進的であるとともに、和泉・能登段階と天王山段階とでその差異がより明瞭である。和泉・能登両遺跡は会津盆地、天王山遺跡は中通り南部であるが、会津地方でも細田遺跡(古川ほか 1988)で天王山段階資料がややまとまっている。中通りでは和泉・和泉段階の資料は明らかでないものの、資料がなお限られているからであろう。したがって、この変遷自体は認めてよい。

この3段階区分と周辺地域との編年対比はどうであろうか。和泉段階資料のうち、3の口頸部界をなす大振りの交互刺突文と、11のように上方の刺突が短縦線で描かれる交互刺突文は、佐藤信行氏が天王山式成立期に位置づけた兎Ⅱタイプの土器と共通する手法であり、能登段階の14は兎Ⅱタイプそのものである。しかし、兎Ⅱタイプの資料がもっともまとまる仙台市下



第1図 天王山式土器の3段階変遷

ノ内浦遺跡では、口縁部文様帯が14のような縦線を充填するものと縄文のみのものが多数を占め、頸部文様も能登遺跡のような各種磨消縄文をおく例は稀薄であり、縄文はLRの横回転施文が主である。したがって、和泉・能登の2段階がともに仙台平野・北上川流域の兎Ⅱタイプ段階に併行すると判断でき、差異が顕著でもあるので兎Ⅱ遺跡や下ノ内浦遺跡の資料を兎Ⅱ式土器と設定する。北上川流域の天王山段階資料としては宮城県上ノ原A遺跡などが挙げられ、福島方面との共通性が高まる。本稿では、兎Ⅱ式および和泉・能登段階を天王山式1期、天王山段階を同2期とし、福島県域の和泉段階・能登段階をさらに1a期・1b期と呼んで編年対比の便宜を図ろう。そして、兎Ⅱ式分布圏よりも北側の青森県八戸周辺域では、八戸市昼場遺跡（大野1999）など口縁部文様帯に交互刺突文が明瞭な一群とともに、上北郡六ヶ所村家ノ前遺跡（神1994）の一部のように文様帯区画に交互刺突文をもつ兎Ⅱ式とは異なる型式が分布する。日本海側方面でも特有の土器群が分布しており、東北の天王山式1期にはすくなくとも4つの地域型式が併存する。日本海側では新潟県北部の下越地方に天王山式1期の充実した資料があり、本稿で問題とする事柄と直結するので、次項で触れよう。

(b) 新潟県域における天王山式土器の新古相

新潟県内では中・下越地方に広く天王山式土器が分布しており、特に阿賀野川流域以北の新潟市石動遺跡（廣野1996）・豊栄市松影A遺跡（加藤2001）・中条町兵衛遺跡（水澤1998）・村上市砂山遺跡（野田ほか2003）・滝ノ前遺跡（野田ほか2003）にまとまった資料がみられる。野田豊文氏は、これら資料群を、本稿の和泉段階を含む能登段階併行の砂山3群と、天王山段階の砂山4群とに2分する。明確に分離できない部分があり、また帰属を変更すべきだと思われる資料が若干認められるとしても、基本的には承認したい。野田氏の砂山1群は宇津ノ台式系統、2群は山草荷式＝川原町口式で、小松式や栗林式と共伴して中期後半の土器群を構成しており、こうした特徴は加治川村山草荷遺跡と共通するので後述のように山草荷式とし、砂山3・4群を砂山式として一括した上で前半期を1期、後半期を2期と呼びかえて議論をすすめよう。

新潟県域の天王山式には、前項で福島県～岩手県域で天王山式1期と一括する際に基準となった兎Ⅱタイプの実例はみられない。したがって、2期の天王山段階以前の一群を抽出するために、まず明らかに天王山段階以前と考えられる属性を抽出し、その特徴を確認するところから始める必要があろう。

そこで注目したいのが、岩手県域の和井内東式に認められた台形刺突列である。和井内東式は、明らかに交互刺突文の分布圏内にありながら実例を欠いており、天王山式直前に位置づけられる型式である（石川1990）。ただし、従来の典型天王山式を2期とし、兎Ⅱタイプを伴う一群を1期とすると、より北方の青森県六ヶ所村家ノ前遺跡にも兎Ⅱタイプは認められるので

1期以前に位置づけられることになる。しかし、福島県域の1a期＝和泉段階が中期の伝統を明瞭に残す段階であることを考慮すると、現時点では1a期である可能性も排除できない。したがって天王山式1a期かその直前と判断できる。

この台形刺突文は中条町兵衛遺跡でも検出されたが、砂山遺跡で初めてまとまりがつかめた属性である(第2図1～14)。台形刺突列は、刺突部が台形の例を典型とするが、三角形や円形をなす例もあり、刺突文部が面をなす変異幅の中で理解しよう。台形刺突列は、砂山遺跡では主に頸部と胴部の文様帯区画に採用される。問題は台形状刺突列が交互刺突文と共伴するかどうかである。先の拙稿では、兵衛遺跡例を挙げて、典型天王山式に先行する一群として中期末に遡る可能性もあると述べたものの、断定はしなかった(石川2000a:19ページ)。そこで、公表された砂山遺跡資料で再確認すると、甕2の台形刺突列は上下から施されることによって交互刺突文を形成し、壺14では頸部のⅡa文様帯(無文)と胴部のⅡ文様帯の区画として、交互刺突文と重ねて用いられている。また、兎Ⅱタイプに類似する縦短沈線がⅠ文様帯に密に施された17・18でも、口・頸部界区画に交互刺突文が採用されており、台形刺突列と交互刺突文は共存するとみてよい。

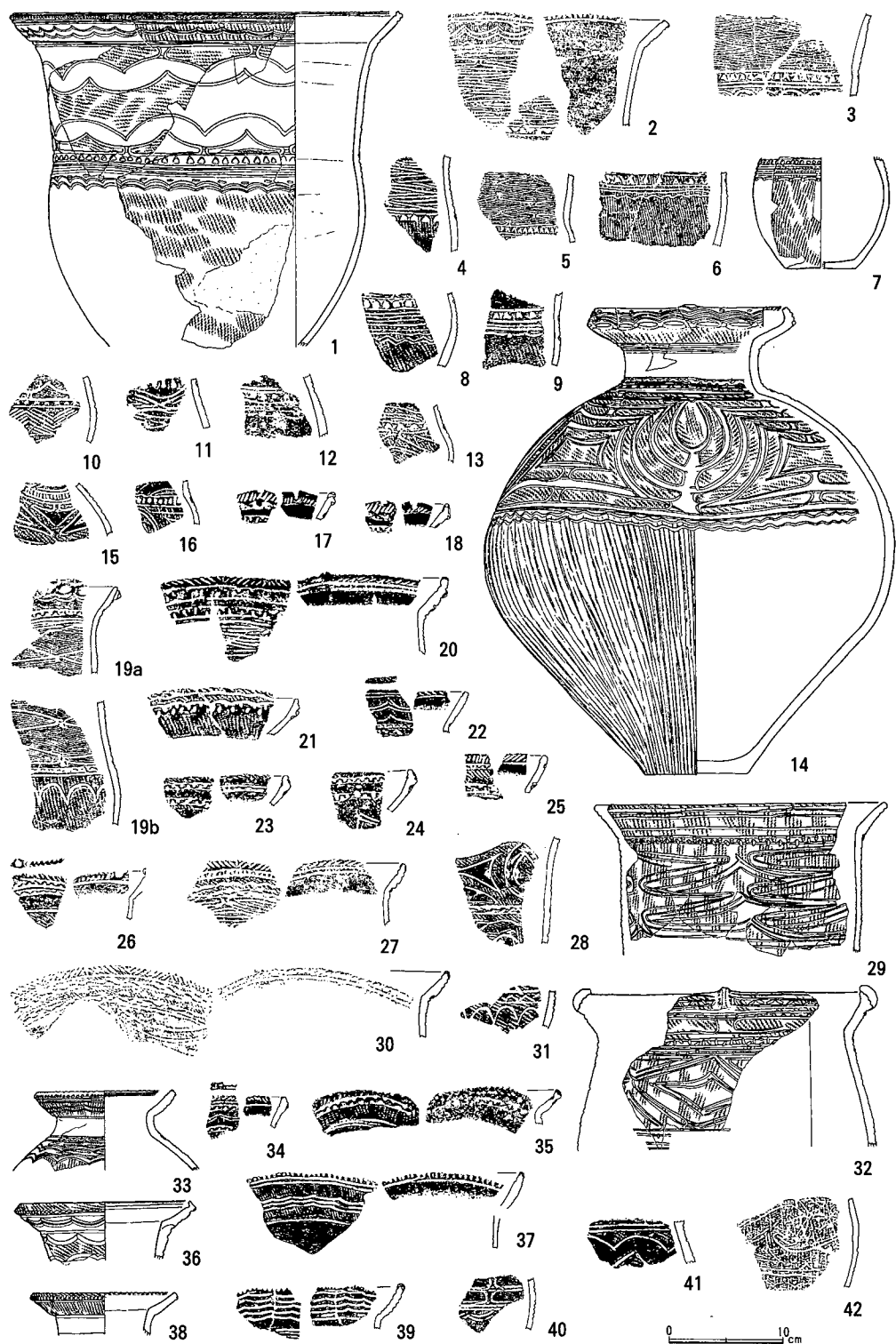
それでは、砂山遺跡で交互刺突文ある土器の全てが台形刺突列ある土器と共存するのであろうか。福島県域の天王山式3段階編年では、交互刺突文は1a期(和泉段階)からみられ、1b期(能登段階)・2期(天王山段階)と順次発達して行く。もし砂山遺跡で台形刺突列が主体をなす段階が実在するなら、それは1a期に対比するのが合理的であるし、交互刺突文が明瞭な一群も伴うなら1b期とも併行するとみた方がよからう。どのように判断すべきであろうか。

まず交互刺突文自体に注目すると、砂山遺跡では台形刺突列よりも交互刺突文をもつ実例が多く、頸・胴部界にも盛んに用いられている点は、1b・2期の特徴である。また砂山遺跡で数例認められる長めの刺突文をジグザグに施すタイプの交互刺突文(214・309・252)は天王山遺跡に1例(第1図23)ながら認められることをみると2期にも接点があると見た方がよい。さらに砂山遺跡には天王山式に後続する土器群(野田他2003:360)もある。

したがって、砂山遺跡は、台形刺突文だけの段階があるなら1a期とできようが、交互刺突文も伴う段階と認めた方が合理的であり、1b期にも併行する部分を持つから、1期を主とする考える。一方、砂山遺跡と同じ村上市内にある滝ノ前遺跡は、資料数が限られるものの、口縁部のⅠ文様帯内部に交互刺突文を充填する2期天王山段階に特徴的な一群があり、砂山遺跡にはこれがみられない点も1期を主とする根拠とできよう。

(c) 新潟県域の天王山式の特徴と福島方面との相関

以上の整理を踏まえて、新潟県域の天王山式土器＝砂山式の特徴を再確認し、福島方面と相関をみてみよう(第2図)。



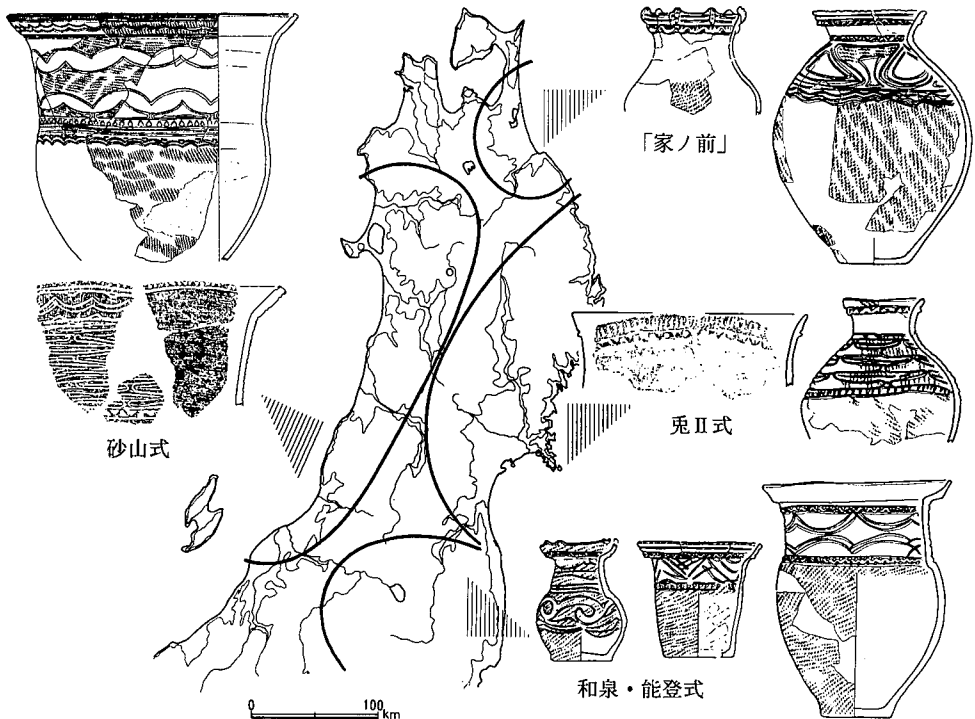
第2図 砂山遺跡の天王山式土器

〔特徴 a〕 文様帯構成と文様構図の点では、まず新潟県域では頸部文様帯が発達し、そこに重菱形文が盛用される際立った特徴がある。重菱形文は、無文地に細線を密に施して描く手法（2・3・19）が特徴的で、縄文を地文とする粗い構図の重菱形文（29・32）は、交互刺突文の特徴を基準とすれば天王山段階に下るものと判断できる。頸部に重菱形文を施す例は、福島県内でも会津坂下町の館ノ内遺跡にみられる（古川ほか 1988）が、1 例だけであり、新潟方面からもたらされた可能性を考えるべきであろう。

〔特徴 b〕 器形面では、新潟県域では 1 期から口縁の内湾と伸びが明瞭で、福島県域よりも早いことがわかる。福島県域では、1a 期は口縁部の内湾は壺だけに明瞭で、1b 期になって壺・甕とも口縁部下端が屈曲して緩く内湾するようになり、2 期で内湾口縁が発達する。一方、1b 期の能登遺跡に特徴的な、頸・胴部界の屈曲や胴部の膨らみは新潟県域の資料では認められない。

〔特徴 c〕 口縁部内面に幅狭い文様帯を設ける点も、新潟県域に際立つ特徴である。交互刺突文で下端を区画したり（23・24・35）、沈線で区画した中に短斜線を充填したり（17・18・22・25・30 など）、縄文のみを施文する場合もある。重菱形文の館ノ内遺跡例が口縁部内面に縄文が施されているのも新潟方面と共通する。

〔特徴 d〕 口縁部上端の幅狭い帯に短斜線を充たし、等間隔に斜線の向きを変える手法（20・27・30）も新潟県域に特徴的である。



第 3 図 天王山式前半期の地域差（土器は縮尺不同）

〔特徴 e〕 縄文原体の圧倒的多数が RL で、条が縦走するよう斜め回転施文するのも、新潟県域の 1 期に明瞭な特徴である。口縁部と胴部は縄文の条がみな縦走し、頸部は原体が横回転施文されるなかに稀に横走が認められる。もちろん天王山式の縄文原体は RL で、条が縦走・横走のが基本であるが、前記のように福島県内では天王山式でも 1b 期から 2 期へと徹底され、1a～1b 期では中期以来の伝統である LR や付加条がなお明瞭である。福島県域では 2 期に至っても、部位ごとに原体の回転方向を変えて縄文の条の走向を変える手法も、また胴部の条を縦走させる手法もともに不徹底で、頸・胴部ともに条が横走する例が少なくない。

以上のように、新潟県域の天王山式＝砂山式、特に 1 期は福島方面とは異なる特徴をもっている。判別が容易な特徴 a に着目すると、砂山式は新潟市石動遺跡から秋田県北東部の鹿角郡小坂町大岱 I 遺跡（大野 1984）・館平館遺跡（児玉 1987）まで確認できる。これは太平洋側の天王山式 1 期諸型式の広がりよりもはるかに広範な分布圏を形づくっている（第 3 図）。この日本海側の天王山式 1 期＝砂山式が備える特徴 a～e のうち、b の口縁部の内湾と伸びと、e の縄文原体と施文法は、ともに従来天王山式の基本的特徴と見てきたものであり、e は北海道の恵山式土器の新しい部分に由来する属性である。特徴 b・e とともに、1a 期かその直前に位置づけられる秋田県大館市はりま館遺跡や、さらに北方の青森県六ヶ所村家ノ前遺跡でも認められるから、青森県全域から新潟県北部域に至る日本海沿岸方面では、天王山式成立期にすでに広く採用されていることになる。しかし、岩手県江刺市兔Ⅱ遺跡（佐藤 1989）や仙台市下ノ内浦遺跡（吉岡 1996）の兔Ⅱ式では、口縁部の内湾は認められても伸びは顕著でなく、原体も LR がむしろ主体をなし、縄文の条の縦走も著しく不徹底である。したがって、典型天王山式（天王山式 2 期）の基本的特徴である口縁の伸びや縄文 RL、縄文の条の縦走は、日本海側の天王山式 1 期の特徴が 1b～2 期にかけて福島方面に影響を与えたか、あるいは天王山式 2 期にあらためて東北地方北部から一斉に南部まで拡散したかの、いずれかと考えられる。筆者はさらに先立つ中期末の状況から考えて、前者と判断する。

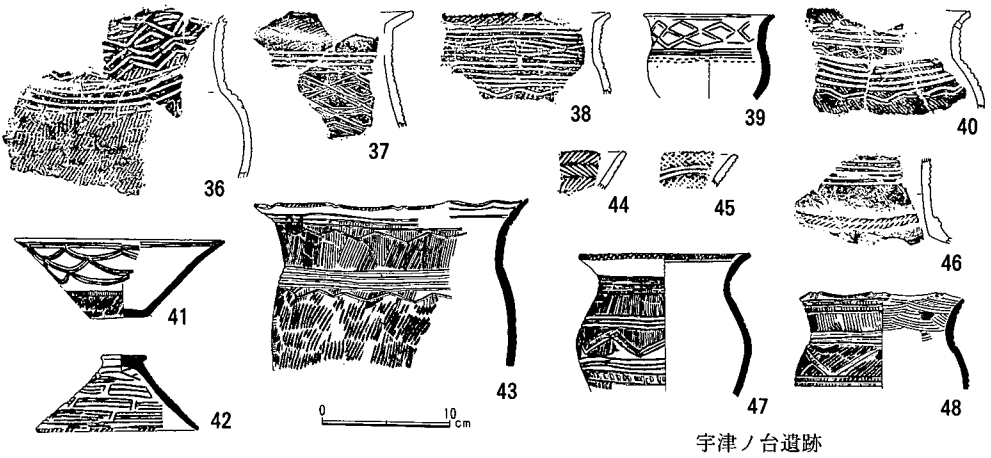
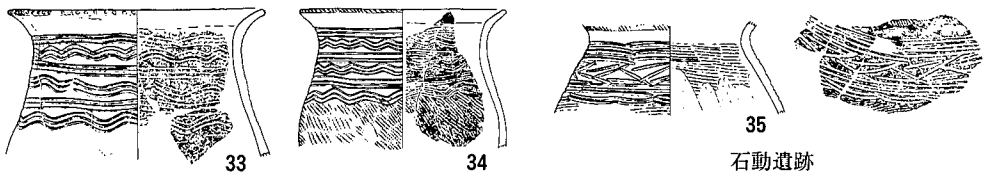
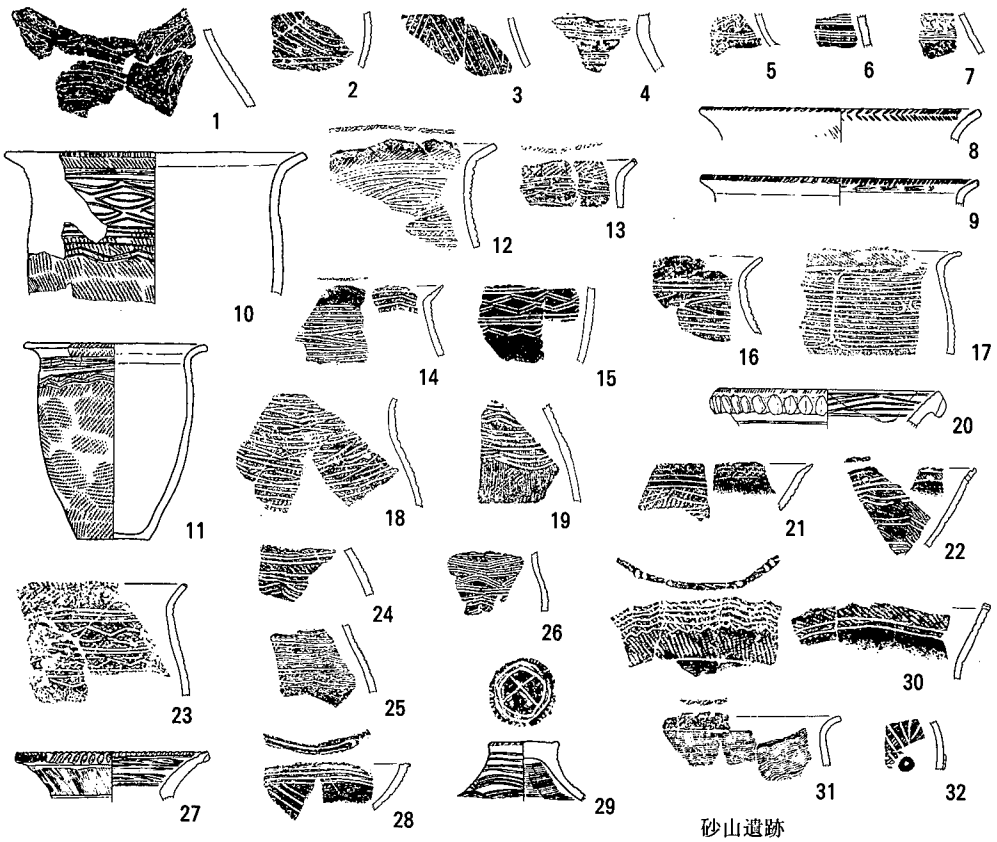
3. 天王山式成立前における宇津ノ台式土器の南下と定着

(a) 砂山式以前の砂山遺跡の土器群

砂山遺跡では、天王山式 1 期に先行する中期末の土器群もまとまっており、日本海側に特徴的な天王山式土器が形成される経緯を知ることができる。

第 4 図 1～32 が砂山遺跡の中期末に属する土器群である。内容を確認しよう。

砂山遺跡の中期末土器群は、東北地方南部の川原町口式系統、北陸方面の小松式系統、秋田方面の宇津ノ台式系統、長野方面の栗林式系統という、4 つの系統から構成される。1～3 が川原町口式系統の土器で、壺に限られる。図示例はいずれも胴上半部に 2 条同時施文の渦文や重三角文が描かれるが、1 本描き施文も伴う。肉眼的には福島方面の資料と判別できない。4



第4図 山草荷式と宇津ノ台式土器

～9は小松式系統の土器で、壺4～7と甕8・9の基本2器種が揃う。ハケメ整形され、頸部～胴部櫛描き直線文・波状文・簾状文・短斜線文、口縁部端面や内面にハケメ刺突文が施される。10～29が宇津ノ台式系統の土器で、甕(10～17・23・25・26)、壺(19・20・24)、浅鉢(21・22・28・22は砂山式か)、蓋(29)の各器種が揃う。甕では、口縁部の外折・外反、沈線による重菱形・鋸歯状文を充たした頸部文様帯の発達、甕・壺・浅鉢各器種における内面施文の明瞭な点が特徴的な土器群である。そしてこの宇津ノ台式系統土器には、ハケメ整形を採用し(23～29)、直線と鋸歯文や連弧文を重ねる構図を櫛描き手法で描くもの(24～26)や鋸歯部が完全に波状文化した例もあり、口縁端面をハケメで刻む手法(27)があるなど、小松式土器の土器製作技術や文様要素を取り込む一群が明瞭である。31・32は栗林式土器で甕(31)・壺(32)・鉢の3器種がある。栗林式でも2式(新)～3式(石川2002)に対比できよう。

これら4系統の土器群のうち宇津ノ台式系統の土器が多数を占め、他は小松式系統と川原町口式系統がこれに次ぎ、栗林式は確実の例は5点のみである。これら宇津ノ台式系統土器が新潟県域北部に定着している事実が、前項で問題にした天王山式土器成立期の動向を理解する上で重要である。砂山遺跡のこのような土器群は、早くに加治川村山草荷遺跡(小林・森本1938・大木・中村1970・高橋ほか1979)で知られている。山草荷遺跡資料は、渦文などをもつ川原町口式の壺が砂山遺跡よりも目立つために、従来はそれらに注目する傾向が強かったものの、むしろ山草荷式と呼ぶべきこの地域独自の土器はむしろ宇津ノ台式系統の土器群である。村上市滝ノ前遺跡(関1972・野田ほか2003)や、最近では新潟市石動遺跡(廣野1996・石川2000b)・豊栄市松影A遺跡(加藤2001)・岩船郡神林村長松遺跡(田辺1991)などでもややまとまりが認められ、断片的ながら西蒲原郡巻町山谷古墳下層(荒木ほか1993)でもみられる。新潟県最北端の岩船郡山北町府屋間ノ内遺跡でも、頸部に3条櫛歯で菱形文を描く甕が、単体ながら確認されている(須藤1987)ので、阿賀野川流域以北の下越地方に広く分布することがわかる。

では、これら山草荷式土器は、秋田県域の土器型式として設定された宇津ノ台式土器と、どのような関係にあるのであろうか。第4図36～48が宇津ノ台式土器の基準資料(須藤1970)で、宇津ノ台式は器種構成も文様帯構成・文様構図も山草荷式と共通点が多いことは容易に確認できよう。篋描き沈線による斜格子目と直線文(45)、横羽状ハケメ刺突文(44)、ハケメ刺突文を伴う頸部突帯文(46)、ハケメ整形³⁾(43～48)など、小松式系統の要素も定着している(須藤1970・小玉1975)。相違する点としては、宇津ノ台式では小松式要素を採用した一群に櫛描き手法はみられず、篋描き沈線に限られること、宇津ノ台式で連弧文が山草荷式よりも明瞭であること、山草荷式では浅鉢に水平口縁が目立つ点などが挙げられる。しかし、両者をひとつの土器型式として包括し、相違点は秋田県域と新潟県域との地域差とみなしたい。両者を含めて宇津ノ台式と理解し、砂山遺跡など新潟県下越地方の地域的土器群については、もっと

も早く把握された山草荷遺跡をもって代表させて下位概念として山草荷式と呼び、後期初頭の天王山式1期の地方型式砂山式との峻別をはかりたい。

(b) 宇津ノ台式土器および北方系要素の南下

新潟県下越地方では、中期前半段階の資料としては北蒲原郡京ヶ瀬村猫山遺跡が比較的まとまっている（古沢ほか 2003）が、在来系土器が主体であって、秋田方面との関係を見いだすことはできない。中期中頃は断片的な資料しかなく詳らかではないものの、南御山2式と小松式土器とがともに進出して在来系土器と組成すると判断できる（石川 2000b）。それに次ぐ二ツ釜式併行期の状況はまったく不明である。その点を断った上で宇津ノ台式の地方型式である山草荷式が成立する意義を考えよう。

宇津ノ台式土器は秋田県域で生成された土器型式であるから、新潟方面で山草荷式が形成されたことは秋田方面から新たな土器型式が南方へと分布圏を拡大したと見ることができる。中期前半～中頃にはみられなかった現象である。しかし、単に宇津ノ台式土器の分布圏が新潟県域まで拡大したというだけでなく、次のように青森県域から北海道渡島半島域の先行型式の要素がその中に明瞭に認められることに注意したい。

つまり、頸部を筒形につくって口縁部を外折させる器形（第4図 36～40 など）が田舎館式や恵山式に特徴的であることは早くに須藤隆氏が指摘しており（須藤 1970）、頸部に幅広い文様帯を置いて菱形構図を配置する（10・12・36～39 など）のも田舎館1式（石川 2003：宇鉄Ⅱ式）の系譜でこそ理解できるものである。縄文原体にRLを採用すること（10・17・24・30・34 など）も、縄文原体を斜め回転施文して条を縦走させる（10・18・19・36・38・43 など）ことも、津軽海峡の南北両地域に明瞭な手法を受け継ぐ特徴である。そして30の例は、無文の筒形頸部に内湾気味に伸びる口縁部がつき、その外面が幅広い文様帯をなしており、全面RL縄文の条が縦走する点を含めて、田舎館3式や恵山式の新しい部分と共通する特徴を持っている。宇津ノ台式土器の南方への分布拡大は、さらに北方の要素が新潟県域まで普及し始めたことも示している。

前節で述べたように、次期の砂山式では、仙台平野～北上川流域の兎Ⅱ式、福島県域の天王山式1期よりも口縁部の拡張が顕著で、RL縄文がより徹底し、縄文の条の縦走も明瞭であった。こうした特徴は中期末の宇津ノ台式やその新潟県域での地方型式である山草荷式で現れ始めた北方系統の要素の延長線上で理解すべきものである。したがって、中期末の日本海側に宇津ノ台式土器の分布拡大に伴ってより北方の土器要素が定着し始め、後期になってさらに福島方面に普及して行ったと考えられる。

なお、秋田県域の宇津ノ台式土器に特徴的な重菱形文は、岩手県二戸郡一戸町上野遺跡（高田 1985）や水沢市橋本遺跡（佐藤ほか 1992・1995）、宮城県玉造郡岩出山町境ノ目A遺跡

(佐藤ほか 1982) などでも認められるが、RL 縄文は稀薄ないし欠落しており、天王山式 1 期の兎Ⅱ式と同様であることに注意したい。

4. 中期後半における北陸と東北・北海道とのかかわり

それでは、中期後半における動向が東北地方の北部・中部日本海側から南への一方向的なものであったかという点、そうではない。

(a) 小松式土器とその要素の広がり

北陸の小松式土器やその仲間が新潟県域に姿を現わすのは、北蒲原郡安田町大曲遺跡第 4 号墓坑や六野瀬遺跡(石川 2000b)、京ヶ瀬村猫山遺跡(古澤ほか 2003)の断片的資料からみて、八日市地方遺跡 5～6 期(福海ほか 2003)といった小松式成立過程段階からと判断できる。そして新潟平野に定着するのは、上越市吹上遺跡(笹澤ほか 2002)・柏崎市下谷地遺跡(高橋ほか 1979)・三島郡和島村大武遺跡などの資料から八日市地方遺跡 7・8 期といった小松式典型段階からである。佐渡や下越地方では現在確実な例を欠くとはいえ、同様であろうと考える。しかし、下越地方の砂丘地帯では、同時期の主体をなすのは宇津ノ台式(山草荷式)土器であって、小松式の存在が明瞭で、しかも南北で比率に高低があるとしても、基本的には客体的な位置にあると考えられる。さらに、下越地方以外の東北地方ではもはや搬入品や模倣品として単発的に存在する状況となる。

小松式土器の搬入品と見られる例は、福島県会津坂下町中開津台畑遺跡の小形甕(井関・中村 1964・長尾 1985)と会津若松市一ノ堰 B 遺跡(芳賀 1988)に各 1 例あるのみである。台畑例は胴部の張りが弱い器形で、口縁端部を斜めに刻み、胴上部に 4 条の櫛状具で直線文 2 帯とその下に波状文 1 帯を置く実例である。胴上部に和井内東式系統の渦文をもつ天王山式壺が、同じく開田時の地下げで採集されており、中村五郎氏は共伴例と判断されている(井関・中村 1960)。しかし、櫛目が太く明瞭で、波状文の振幅が小さい櫛描文は小松式でも形成期に認められる手法であり、胴部の張りが少ない点もこれと矛盾しない。小松式が新潟平野であってもなお定着する以前の段階に位置づけるべきであろう。一ノ堰 B 遺跡例は短頸の壺で、口縁部外面に肥厚帯が一条めぐり、そこに横羽状ハケメ刺突文が施された例である。この手法は鉢類によく用いられるもので、壺としては異例であるが、頸部～胴部とも粗いハケメ整形される点からも小松式と判断してよい。このように新潟平野以西からの搬入品と考えられる小松式は、会津盆地の 2 遺跡各 1 例のみであり、例数の点でも、また地域的にも限られることがわかる。

宇津ノ台式土器に、北陸の小松式土器の要素が受容されていることについては、前節で述べた。新潟県下越地方の山草荷式土器では櫛描き手法が採用され、秋田方面の宇津ノ台式では櫛描き手法は採用されないものの、斜格子目と直線文、横羽状ハケメ刺突文といった櫛描文の文

様要素が沈線で表現されている。では、宇津ノ台式土器の分布圏外ではどうであろうか。

岩手県水沢市橋本遺跡（佐藤・伊藤 1992・1995）では、3・4条の直線文と2条の円形刺突列を並列させた壺1点があり、宮城県玉造郡岩出山町境ノ目A遺跡（佐藤ほか 1982）でも、口縁端面と内面に斜格子を描き、胴上部に橋本遺跡と同じ構図を施してある。いずれも、秋田県域の宇津ノ台式土器で小松式の要素を取り込んだ一群と合致しており、また両遺跡とも宇津ノ台式とみてよい重菱形文や連弧文が認められるので、宇津ノ台式自体として受容されたものと判断した方がよい。

このように見てくると、東北地方における小松式土器の影響は、基本的には宇津ノ台式土器に限って明瞭に認められ、会津では小松式土器分布圏である新潟平野の東隣接地域として少数の搬入品があるだけということになる。

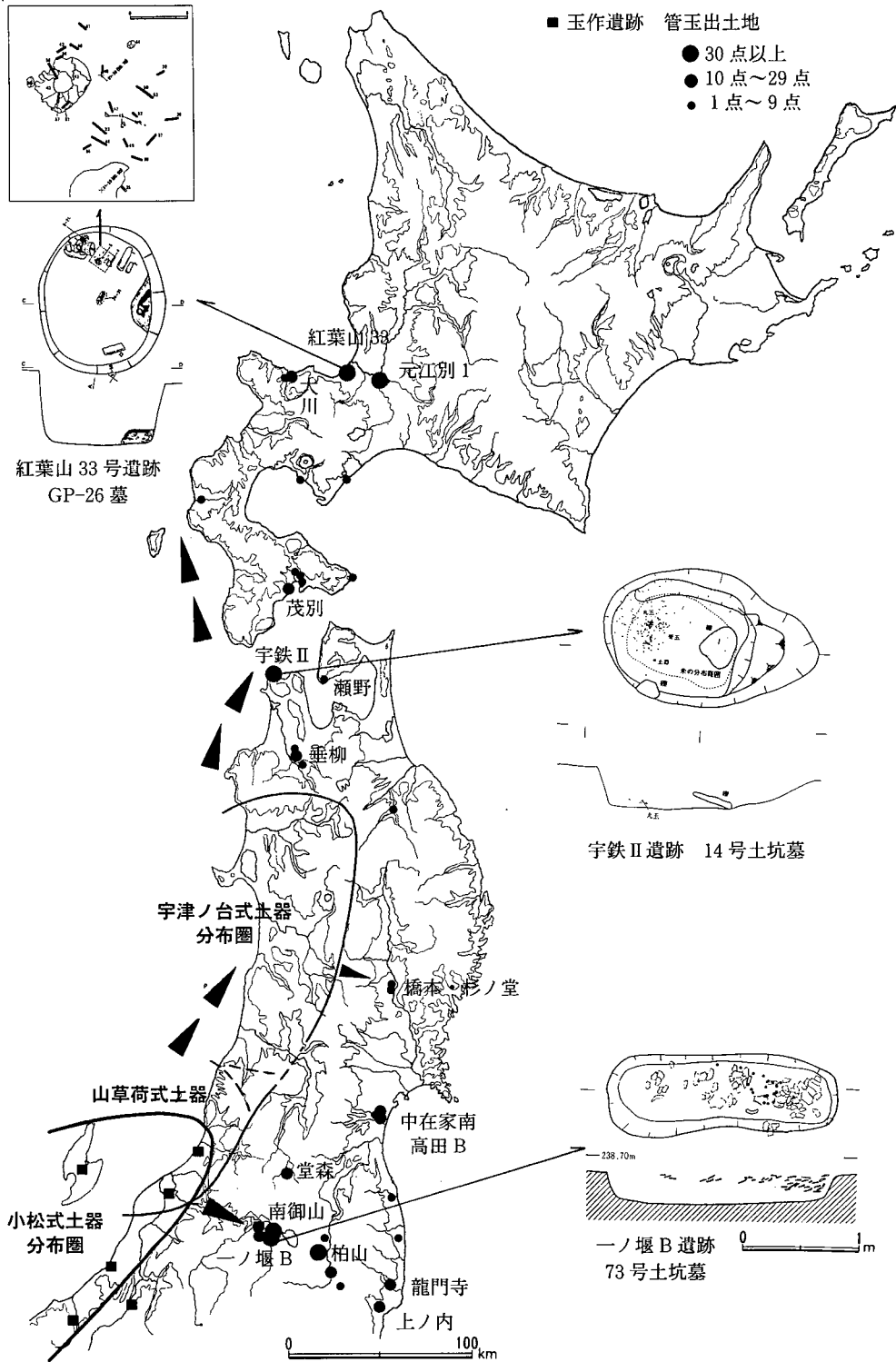
(b) 弥生管玉の流通から

土器では北陸小松式土器圏と宇津ノ台式分布圏以外の東北地方との関わりは稀薄であるが、玉類ではまったく様子が異なる。第5図に東北・北海道における弥生中期中頃～末段階の緑色凝灰岩製・鉄石英製管玉の出土例を図示した。

すると、宇津ノ台式土器の分布圏である秋田県と山形県庄内地方では、この段階の遺跡が少ないし墓地も検出例がない点に注意する必要があるとしても、出土例がない。両県以外では、福島県域から宮城県にかけてと青森県から道央までの2か所に多く、中間域の岩手県内にも点々と検出されている。こうした分布の偏りは、その生産と流通のあり方を反映したものであることは確実であろう。

つまり、福島県域で管玉を多数出土するのは、隣接する新潟県下越から佐渡にかけて南御山2式・二ツ釜式・川原町口式の壺が明瞭に認められ、会津若松市一ノ堰B遺跡で搬入品とみられる小松式土器の壺がみられるように、新潟方面との交流の中でもたらされたと判断して誤りなからう。その場合に、緑色凝灰岩製が多数を占め、鉄石英製を含まない点は注意すべきで、製品から緑色凝灰岩製を選択した結果か、それとも製作地域の問題かのいずれかであろう。福島市勝口前畑遺跡では在地石材を用いた勾玉を製作したことが確認されているが、その素材分割に施溝、穿孔に石針を用いる北陸の管玉製作技術の応用とみられる技法が採用されていること（斎藤 1998）も、管玉が北陸方面からもたらされたという判断を支持しよう。仙台平野の場合は、高田B遺跡で珪化凝灰岩・珪質頁岩などを用いた管玉と勾玉を製作したことが確認されているが施溝分割も分割自体も採用されておらず、北陸の玉作技術との繋がりを確認することは難しい。しかし、製品18点中15点は緑色凝灰岩製で、おそらく北陸からの搬入品を含むと考えられる。ただし、兎Ⅱ期に下るものの仙台市下ノ内浦遺跡の管玉が鉄石英製であって、福島県域にはみられない点は留意しておくべきで、福島方面を介さぬ物流を考える必要がある

弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係



第 5 図 弥生中期中頃～末の弥生管玉出土分布

かもしれない。

一方、青森県域から北海道にかけては津軽・函館周辺・余市～石狩低地北半の3か所に集中し、日本海側に分布が偏る傾向があり、また緑色凝灰岩を主として北海道ではこれに鉄石英製品を伴うこと、さらに藁科哲男氏の蛍光X線分析では余市町大川遺跡出土緑色凝灰岩製管玉の石材産地は佐渡と出雲と判断されていることから、日本海側沿いの流通網にのってもたらされたものと考えてよい。ただし問題は、こうした流通網の担い手をどのように考えるかであって、現在までのところ縄文土器が北陸で確認できるのは江別C1式からであるので、中期段階は土器型式上青森県域方面と繋がり of 明らかな宇津ノ台式土器集団を考えるのがもっとも適切であろう。緑色凝灰岩と鉄石英を用いた管玉生産を盛んに行なったことが明らかな佐渡の平田遺跡では、下越地方の山草荷式土器にはみられない斜格子目を篋描きした宇津ノ台式が確認されているし、秋田県域の宇津ノ台式には小松式要素が明瞭であることは先に述べたとおりである。また、岩手県南部の水沢市橋本遺跡で宇津ノ台式土器が出土し、鉄石英製管玉も確認できることも、仙台平野の事例とともに、福島方面を介することなく宇津ノ台式集団を介して管玉が流通する状況を考えるのがもっとも合理的である。そして兎Ⅱ段階の岩手県常盤遺跡で出土した管玉25点中14点が緑色凝灰岩、11点が鉄石英であったことは、こうした物流が兎Ⅱ段階＝天王山式1期まで持続したことを示していよう。

このように、宇津ノ台式土器は南方の新潟方面に分布圏を拡大するとともに、宮城県北部・岩手県域に少ないながらも点々と出土例を見いだすことができる。東北地方の隣接諸地域との恒常的な関係を保持し、佐渡方面から入手した緑色凝灰岩や鉄石英製管玉の流通にも重要な役割を果たしたと考えられる。宇津ノ台式土器を介して北陸の小松式土器の側から南から北へと物資・情報が伝達されたことがわかる。前述のように、宇津ノ台式土器には青森・北海道方面の影響を受けた要素が明瞭に認められ、新潟方面では宇津ノ台式土器の定着によって、土器に北方要素が出現してくることを合わせ考えると、弥生中期末段階の東北日本において、いかに宇津ノ台式土器の役割が重要であったかが理解できるであろう。

5. 宇津ノ台式から天王山式土器へ ―まとめにかえて―

以上見てきたように、従来、中期末までの地域性を解消するように成立したと評価される天王山式土器も、実はその前半期には著しい地域差をもっており、それは中期末の状況をよく継承したものである。そして、その中でも特に秋田県域の土器型式とされる宇津ノ台式土器が、中期末に新潟県域北部に分布を拡大して地方型式として山草荷式を形成する点が、天王山式土器形成に重要な基礎を作り出すことになった。この山草荷式と宇津ノ台式土器は、青森県域～北海道方面と共通する北方要素をもつと同時に、北陸小松式土器の要素も取り込むという、遠隔地の土器型式属性を受容して構造化する特徴をもっており、東北地方の地域性の強い中期末

土器型式群を再編する糸口を準備することとなった。宇津ノ台式とその地方型式たる山草荷式土器を母体として成立した砂山式は、天王山式前半期の日本海側地方型式であるが、前代と同様に東北各地の前半期（1期）天王山式土器に関与して、やがてRL原体による縦走・横走縄文が顕著な、地域差のより薄らいだ後半期の典型天王山式土器を生み出すことになった。

もちろん天王山式土器の形成は、宇津ノ台式や砂山式土器の動向のみで説明できる訳ではない。例えば天王山式土器のもっとも基本的特徴である交互刺突文は、口縁部文様帯下端の隆帯に押捺する手法と上側から刻む手法との合成によって形成されたものであろう⁴⁾が、これは宇津ノ台式から説明するのは困難であるし、弧線を組合せた各種充填縄文構図の発達も恵山式の新しい部分や和井内東式の関与なしでは説明できない。兎Ⅱ式の口縁部文様帯における縦線充填は恵山式の新しい部分に由来するであろうから、日本海側だけでなく太平洋側でも北方要素が南方に受容されて行く動きを見いだすことができる。口縁部の狭い文様帯や縦位貼付文は道央～道東との関連も考えるべきである（石川 2001）。

しかし、本稿では敢えて日本海側の宇津ノ台式～砂山式土器の動向を重視する見方を提示した。それは、これが単に天王山式土器の成立を考える重要な糸口であるばかりでなく、弥生後期の北陸～東北～北海道の動向を読み解く上でも格好の手がかりを提供すると考えるからである。後期前半には砂山式を含む天王山式土器が北陸南部にまで点々と検出されることや、天王山式直後の六地山・八幡山両遺跡および屋敷式段階に北陸の法仏式系統土器が新潟県域はもちろん、福島県さらには茨城県域にまで確認できること、同じ頃続縄文の江別 C1 式土器が新潟県域にまで姿を見せる。東北在来系の土器群と、西日本的な土器群、さらに北海道の続縄文土器という、まったく異質とも思える 3 系統の土器群が、日本海側を主たる舞台として南北に大きな動きを見せるのである。そうした状況に先立つ歴史動向がここに追跡できると確信するからである。

従来、天王山式土器は東北地方の中で考えるか、あるいは北海道の恵山式をも視界に入れながら検討されてきた。しかし、概して太平洋側の資料ばかりを注視してきたのではなかったであろうか。日本海側の資料は限られるとしても、資料の多寡と歴史的意味とは無関係である。そして北陸方面の動向まで視界に入れることで、天王山式以後についても興味ある視点が見いだせるのである。各地の資料に確かに立脚しながらも、広く周辺各地の資料を等価に読み解く作業が必須である。

なお、本稿は科学研究費基盤研究(B)(2)「関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年」の成果の一部である。

注

- 1) 2001 年 12 月 22・23 日に開催された関東弥生研究会第 2 回大会（福島）の席上、筆者が能登→和泉と発言したのに対して、鈴木氏が和泉→能登→天王山→明戸と反論し、筆者は直ちに前言を撤回す

ることとなった。筆者は、当初、能登遺跡資料は兎Ⅱタイプが明瞭なので天王山遺跡資料や和泉遺跡資料に先行すると判断していた。和泉遺跡の天王山式全体を一括していたのも誤認の原因であろう。ここでいう和泉段階とは和泉遺跡第3包含層出土資料を基準とする。

- 2) 頸部に重菱形文をもつ一群が天王山式兎Ⅱ=和泉～能登段階であることは確実であるが、天王山段階まで存続するか否かは未確定である。松ノ脇遺跡・松影A遺跡といった天王山段階かその直後と思われる資料には細線重菱形文はみられず縄文地の粗い重菱形文しかないから、天王山段階にはない疑いがある。
- 3) 宇津ノ台式土器のハケメ整形は、秋田市地蔵田B遺跡や南秋田郡若美町横長根B遺跡など弥生前期～中期前半の類遠賀川系土器から連綿と継続しており、小松式系統とのみ限定することはできない点は注意を要する。しかし、篋描きによる斜格子文と直線文の組合せ、横羽状ハケメ刺突文は明らかに小松式系統であるから、ハケメを類遠賀川系とのみ評価することも不適切である。
- 4) 拙稿1990では、和井内東式にみられる平行線間の波線に出自を求めた。しかし、交互刺突文が最初に用いられるのは口縁部文様帯の下方区画であるにもかかわらず、この文様は胴部文様帯の区画文様であるから直結しない。むしろ、押捺ある隆帯に刻みが付加する手法を遡及するのが適切であろう。

参考文献

- 相原淳一 2002「天王山式土器成立期に関する層位学的再検討」『宮城考古学』第4号, 28～48頁。
相澤清利 2002「東北地方における弥生後期の土器様相」『古代文化』第54巻第10号, 47～62頁。
青野友哉 1999「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた統縄文文化の特質」『北海道考古学』第35輯, 69～82頁。
石川日出志 1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第3号, 1～20頁。
石川日出志 2000a「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号, 5～32頁。
石川日出志 2000b「南御山2式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第11号, 1～22頁。
石川日出志 2001「弥生後期湯舟沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号, 11～32頁。
石川日出志 2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号, 54～80頁。
石川日出志 2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第1巻, 317～368頁。
井関敬嗣・中村五郎 1960「中開津遺蹟の土器」『福島考古』第3号, 1～3頁。
伊東信雄 1950「東北地方の弥生式文化」『文化』第2巻第4号(復刊第8号), 408～451頁。
伊東信雄 1974「弥生文化」『水沢市史1 原始—古代』291～346頁。
伊東信雄・須藤 隆 1982『瀬野遺跡』東北考古学会。
岩本義雄・天間勝也・三宅徹也 1979『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県郷土館。
大越道正・熊谷金一・西山真理子 1990「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告10』福島県文化財調査報告書第242号, 7～108頁。
太田原潤・野村信生・佐々木辰雄 2000『モダシ平遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第271集。
大野 亨 1999『昼場遺跡・根岸山添遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第78集。
加藤 学 2001『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ 松影A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集。
神 康夫ほか 1994『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第160集。
木本元治・本間宏ほか 1991「和泉遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告13』福島県文化財調査報告書第263号, 5～110頁。
小玉 準 1975「男鹿半島の弥生式土器—日本海海上交通史の一断面—」『男鹿半島研究』別冊, 1～40頁, 男鹿地域研究会。
児玉 準 1984『横長根A遺跡』秋田県若美町教育委員会。
児玉 準 1987「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』

第2号, 35～88頁.

斎藤義弘 1998「弥生中期の勾玉製作技法とアメリカ式石鏃製作について」『福島考古』第39号, 37～56頁.

齋野裕彦 1998『アクセサリーの考古学』地底の森ミュージアム平成10年度特別企画展図録.

笹澤正史・小島幸雄・中村直人 2002『吹上遺跡発掘調査概要報告書』上越市教育委員会.

佐藤信行 1989「天王山式土器の成立と展開—いわゆる交互刺突文の系譜を中心に—」『天王山式期をめぐって』の検討会資料』第1分冊.

佐藤信行・藤原二郎ほか 1982「宮城県岩出山町境ノ目A遺跡の出土遺物」『初』第4号, 弥生時代研究会(宮城県瀬峰町).

佐藤嘉広・伊藤博幸 1992「岩手県水沢市橋本遺跡出土土器について」『岩手県立博物館研究報告』第10号, 19～36頁.

佐藤嘉広・伊藤博幸ほか 1995「岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について(補遺)」『岩手県立博物館研究報告』第13号, 27～48頁.

鈴木正博 2002a『「十王台式」と『明戸式』』『婆良岐考古』第24号, 39～72頁.

鈴木正博 2002b『「伊勢林前式」研究の漂流と救済の型式学』『茨城県考古学協会誌』第14号, 65～87頁.

須藤 隆 1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』第33号第3号, 392～429頁.

須藤 隆 1987「山草荷式」『弥生文化の研究』第4巻, 巻頭図版 PL. 27.

須藤 隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂.

田辺早苗 1991『長松遺跡発掘調査報告書』新潟県神林村教育委員会.

坪井清足 1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器」『史林』第36巻第1号, 50～63頁.

長尾 修(図版解説) 1985『会津の美1 考古編』歴史春秋出版(会津若松市).

中村五郎 1960「福島県天ヶ遺跡について」『考古学雑誌』第46巻第3号, 89～93頁.

中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社, 207～248頁.

野田豊文・滝沢規朗ほか 2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相—村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に—」『三面河流域の考古学』第2号, 奥三面を考える会, 45～117頁.

廣野耕造 1996『石動遺跡平成7年度発掘調査概報』新潟市教育委員会.

福田友之 1989『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県郷土館.

福海貴子・橋本正博・宮田明ほか 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会.

藤田定市 1950『天王山遺跡の出土土器について』(孔版)

藤田定市 1951『昭和25年における天王山遺跡の調査報告(第1報)』(孔版)

古川利意ほか 1988『館ノ内遺跡・細田遺跡』福島県会津坂下町教育委員会.

古澤妥史・酒井亜紀 2003『県営湛水防除事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 大割遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡』新潟県京ヶ瀬村教育委員会.

水澤幸一 1998『兵衛遺跡・四ツ持遺跡』新潟県中条町教育委員会.

吉岡恭平ほか 1996『下ノ内浦遺跡・山口遺跡』仙台市教育委員会.

〈挿図出典〉

第1図1～13=木本ほか1991と14～22=大越ほか1990は石川が再トレース。23～28=坪井1958。第2図1・7・14・29・32・33・36・38は原図を石川がトレース, 他は野田ほか2003。第3図石川作図。第4図の砂山遺跡は10・11・29が原図を石川がトレース, 他は野田ほか2003。石動遺跡は石川2000b, 宇津ノ台遺跡は須藤1970。第5図は齋野1998と青野1999を参考にして作図。

Regional Interaction in the Northeastern Mainland Japan around the Time of Christ from the Standpoint of Pottery

ISHIKAWA Hideshi

The purpose of this paper is to approach the process behind the division of the northeastern Honshu from the Yayoi to Kofun Periods (third and fourth centuries A.D.) into the northern and southern halves from the standpoint of pottery in the Middle and Late Yayoi Period (second century B.C. to second century A.D.). The northeastern Honshu, the mainland of Japan, was situated as a border between the Yayoi culture of the mainland and Epi-Jomon culture of Hokkaido 2000 years ago. This region was a periphery of the Yayoi culture and maintained a strong relationship with Epi-Jomon. Consequently, the northern half of this region was incorporated into the Epi-Jomon culture, while the southern half was incorporated into the Kofun culture in the third and fourth centuries A.D.

For the purpose of the analyses, the author has selected the Tennōyama-type Late Yayoi pottery (first and second centuries A.D.). A previous hypothesis was that the Tennōyama-type pottery was evenly distributed in the northeastern Honshu. Recent results of archaeological survey show that in the first century the northeastern Honshu was marked by the presence of four regionally distinctive types of pottery. Among these four, the Sunayama type on the Sea of Japan coast became a nucleus of the more uniform Tennōyama-type pottery in the subsequent second century. The Sunayama type appeared as a result of adopting both western-Japanese-type Yayoi pottery and Epi-Jomon pottery of Hokkaido in the first century B.C. This was an outcome of information exchange across various regions on the Sea of Japan coast. This leads the author to suspect that the uniformity of the Tennōyama-type pottery, as well as the clear regional differentiation between the northern and southern halves in the northeastern Honshu in the Early Kofun Period (fourth century A.D.) were results of regional interaction that took place over various regions since the first century B.C.

Keywords: Northeastern Honshu (mainland Japan); protohistoric Japan; Yayoi culture; Epi-Jomon culture; regional interaction.